AJU岐阜ダルク

ＡＪＵ通巻 10554 号　昭和５４年８月１日　第３種郵便物認可
ニュースレター　平成２４年７月１７日火曜日増刊

鵜鮎つうしん

岐阜ダルクニュースレター平成 24 年夏号（№36）

「幸せへの道」

岐阜ダルク後援会
会長　斎藤幸二

「しあわせとは追求するものではなく、正しく生きた結果として与えられるものだ」

誰の言葉か覚えていませんが良く味わうべき言葉です。というのは、私たちはいつも正しく生きた結果としての幸福を求めるよりも、手っ取り早く幸福になり、快楽を得ようとするものだからです。たとえばそれは、結婚して生涯重荷を分かち合うという責任をとらずに、相手から性的な快楽だけを得ようとするようなものです。手っ取り早く快楽や幸福感を得られるものの代表が「覚醒剤」でしょう。

しかし人間は正しい生き方を抜きにして本当の幸福感や永続的な快楽を得られるようには造られていません。それによって一時の幸福感や快楽が得られたようには思いますが、そうして手に入れた快楽は、必ず体や心を蝕み、甘い蜜がやがて苦い死の毒へと変わるのです。

今岐阜ダルクの若者たちは長良川の堤防を走っています。走ることで、「ランナーズ・ハイ」という薬物によらない健康的な快感があるのだということを知りつつあるのです。さらに、これからは仲間たちの回復のために働こうとする元メンバーが生まれています。他者のために尽くす事、それはさらに大きな、そして永続的な快楽に変わることでしょう。それは薬物のようにさめてしまったり、自分や他人に害を及ぼすものではなく、ますますその人を健全にし、他の人々からも喜ばれる幸福感なのです。人間はそのように造られているのです。

私たちも本当の幸せに通じる正しい道を、ダルクの仲間たちと一緒に探し、またたどってゆきたいものです。

仲間の体験談

小学校５年～中学２年まで学校でいじめを受けて生活している中で自分が人に対して感情を出して生きてはいけないと思って来た為、いつも気づいたらいっぱいいっぱいになっていて 17 歳～19 歳までシンナーを吸ってその時初めて母親に「こうなったのはおまえのせい」と言い続けて、さみしいと言う事もできませんでした。それからは誰も傷つけないと決めて覚せい剤を 24～27 歳まで使ってもいつも良い子でいるふりばかりをしていました。覚せい剤を使う為には処方薬が必要で母親に嘘をついて自分で病院に行かず薬をもらっていました。

逮捕されてからは「更生する」と決めていましたが、いざ出所したら薬の欲求が強くなり一か月でまた覚せい剤を使いました。快楽はなく「一生薬を使い続ける人生」と感じ、絶望だけでした。

今はダルクと自助グループにつながり、ミーティングで自分の過去の話をするようになり仲間と共感できる部分や薬を使わないで生きている仲間が「幸せ」と言っている仲間の姿が希望になりました。こんな自分も、もしかしたらここに居続けたら、生きててもいいと思える日が来るかもしれないと思いダルクに通っています。

私は 23 歳の時にアパートの３階から飛び降り自殺をして、脊髄が粉砕して体にボルトが入って足もびっこをひきながらしか歩けなくなりました。昼からの運動プログラムでは最初、仲間が走ってる姿がうらやましく思え「私にはできない」と思っていて何度も挫折しそうになったけど、歩いていくうちに足の痛みもなくなり、もしかしたら走れるかもと思い仲間の背中を見ながら走り出したら、今は忠節橋から長良橋まで行けるようになり、だんだん運動が楽しくなってきました。いつも何もしない自分に不満を感じながら生きてきた事を感じ、今は少しだけ生きていていいと思えるようになりました。

最初、怒りという感情がなかったのが仲間にむかついたりしてる自分に気づいて、怒る事がダメなんだと感じダルクに行かなくなったのですが、今のままじゃ何も変わってないと感じて自分の気持ちを責任者に話しました。

初めて仲間に気持ちを話した事とずっと感情を押し殺して生きてきた事に気づきました。今は自分の意志でダルクに再び通っています。

あやが仲間の態度に腹を立てて、泣きながら「もう帰る」と怒っている姿を見て、思わず吹き出してしまいました。「なんで笑うの～」と言いながら笑い泣きに変わるあや。
泣いたり、怒ったり、笑ったり、ありのままの自分を安心して出せるようになると薬を使う必要がなくなっていきます。
（施設長）

岐阜ダルクとのかかわり

各務原病院 理事長 天野宏一

当院はアルコール依存症の治療を本格的に行う為の専門病棟を有する病院としてＳ５５年４月に開院し、早いもので３０有余年の歳月が過ぎようとしています。アルコール依存症に関しては、治療プログラムの度重なる肉付けにより国内標準の治療が施されるようになり、１００名を超える回復者が今もがんばっています。依存症の専門に治療できるということで薬物（シンナー、覚醒剤、ブロン液、大麻等）関連の患者さんの相談もアルコール依存症の人程ではないにしても受け付けてきました。薬物依存の患者さんは年齢が若く、それに伴って、経済的背景、日常生活における社会的実体験の乏しさ等により、離脱期治療から教育期治療へと２－３か月の治療期間設定がしづらく、集団療法の枠組みのなかで、精神療法的接近を中心に情緒的安定と同時に疾病自覚確立をはかっていくのは、３０年を過ぎた今でも悪戦苦闘しているのが現状です。

７年前に岐阜地区にダルクが結成され、自助グループ活動を薬物依存症治療の一つの柱としてアプローチ出来るようになり、月１－２回当院の薬物依存症者の院内ミーティングにメッセージを運んで頂き細々と連携を築いています。最近では処遇困難なアルコール依存症者に対して、集団療法を通じて健全な社会生活体験をする事によって回復の道を歩きはじめないものかと、１０名以上引き受けてもらい、社会復帰につながった数症例を経験しております。

その１人は、Ｓ４８年１０月生まれの男性であり、１）アルコール依存症と ２）薬物依存症 （処方薬依存）のクロスアディクションの症例であり、病院治療では手数がかかり処遇に苦戦しました。
症例はＨ２０年頃より酒を飲むとつぶれるまで飲んでしまい仕事に支障を来していました。Ｈ２０年４月にＡ病院に初回入院。アルコール依存症治療プログラムにて入院治療を受けました。その後も状態は一進一退で、飲酒で迷惑をかけたり他医で所用されたクスリを一気飲みまたは頻回に要求し、それが受け入れられないと興奮するというパターンでした。
当院への入院のきっかけは３度過度飲酒のうえ薬物乱用し朦朧状態で周囲に迷惑をかけたものであり、２度目はラーメン屋で他の客に迷惑をかけ気が付いたら警察署に居ました。
３度目は市バスに追突しケガ人を出しました。入院後はどの入院に際しても些細な事に反応しクスリ、注射の要求、場合によっては退院要求にまで発展し精神運動興奮状態になりその都度の反応が必要でした、その対応に関しては不安定な状態は疾病要因であり、本人のわがままととらずその都度出来る限り対応し、これらを離脱状態と考え客観的に対応するよう心がけました。３度目の入院で家族（妻、親）も疲弊状態となり、アルコール離脱が図られても受け入れが困難な為、当院ＰＳＷの仲介で沖縄ダルクでの受け入れとなりました。Ｈ２２．３．１７当院職員２名で沖縄まで送り届け、沖縄ダルクに入所。その後、何度か無断で施設を離れ飲酒、薬物乱用がみられましたが、その都度一貫して本人が戻ってくれば粘り強く生活習慣を立て直し、プログラムにて自助的に対応する事によって立ち直りをはかり、ダルクの海外研修に参加するまでになり、現在は群馬ダルクで社会生活に適応できています。

ダルクの良さは、日常生活を立て直し、併せて依存に対する集団療法を社会生活の中で強力に行う事であると考えています。今後も病院医療だけでは不十分な症例に対して病院、ダルクの夫々の役割を補完しつつ、薬物依存症者の回復に連携して立ち向かって行くことを願いつつペンを置くことにします。

社会的居場所事業の受託を受けました

内閣府は平成 23 年 1 月、新たな社会的リスクとしての「孤立化」「無縁社会」「孤族」などの問題について、セーフティネットの強化を含めた社会的包摂を推進するための戦略策定を目的として、「一人ひとりを包摂する社会」特命チームを設置したとのこと。
若い失業者、低所得者、外国人、ホームレス、薬物中毒者などを社会から排除しようとして生じた社会的不安が増大し、このような事態が続けば国の崩壊にまで行き着くという危機感から包摂理念がうまれたという。

社会的包摂って何？

聞きなれない言葉だけれど、簡単に言うと生活困難（若い失業者、低所得者。外国人、ホームレス、薬物中毒者など）の問題を抱えた人を社会的に排除しないで、社会的に包み込むこと。社会的に包みこむとは社会の既存の制度を組み替えたり、必要な政策を作り出すことと言われています。

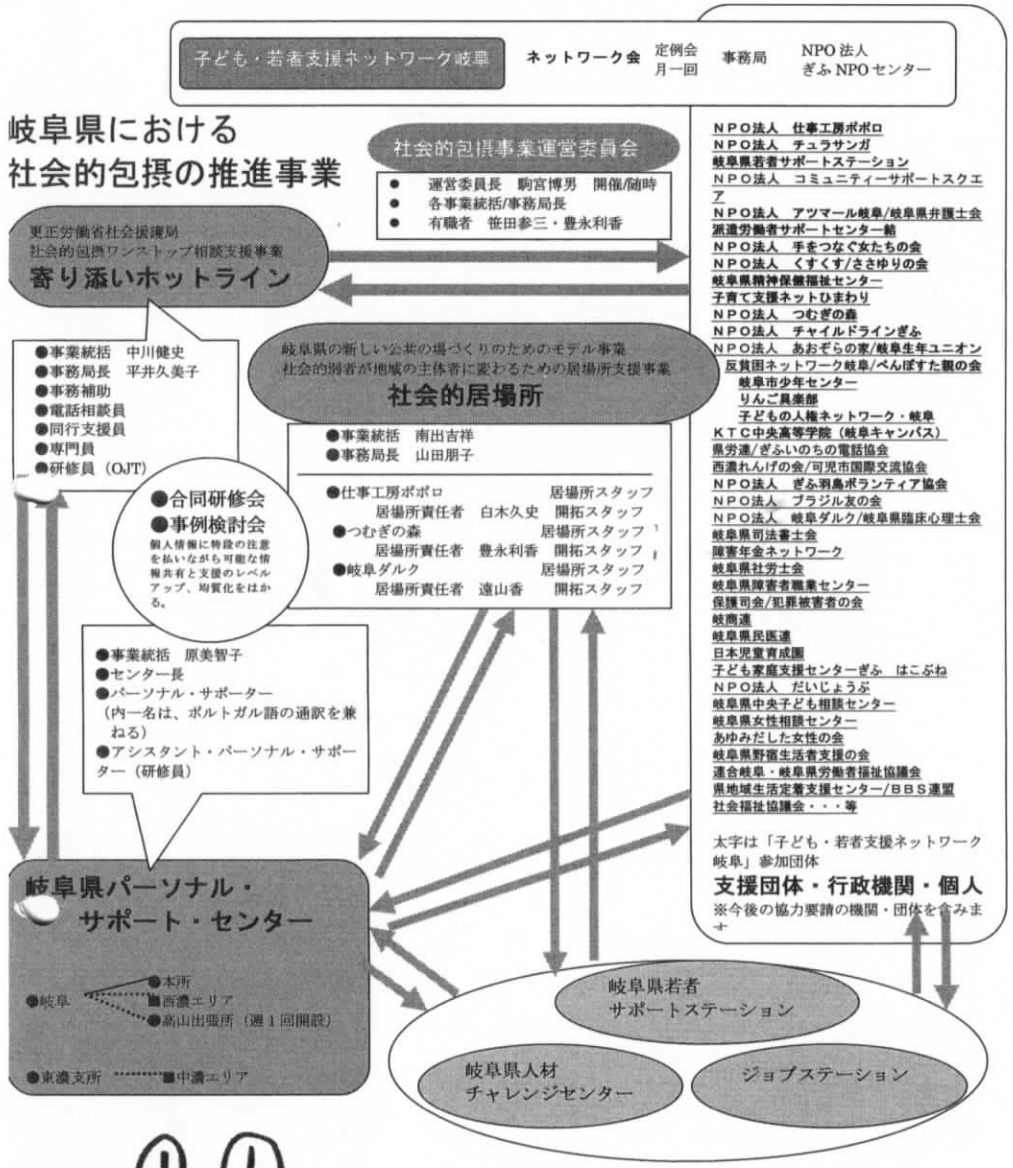
問題を抱える人に寄り添う

ぎふＮＰＯセンターが本年度「社会的包摂を推進」に関係する 3 事業で寄り添いホットライン、パーソナルサポートセンター、社会的居場所づくりを開始しました。
これらの事業は「こども若者支援ネットワーク岐阜」が母体となっています。

社会的居場所として

新しい公共事業として岐阜県から、困難に陥った人を地域社会で支え、「居場所」を提供していく先として岐阜ダルクを含む 3 団体の受託が決まりました。
就労体験や社会参加への機会を開拓し、薬物依存者が地域の中で自立できるようサポートしていきます。
薬物依存者には差別や偏見が多くありますが、今後は岐阜県のネットワークがもっと広がりつながっていくことで、排除しないやさしい社会ができればもっと多くの薬物依存者が回復できると思います。皆様も応援してください。

6 月 26 日（火）岐阜県福寿ふれあい会館にあるＮＰＯセンターにて、仕事工房ポポロさん・つむぎの森さん・岐阜ダルクの 3 団体が集まり、3 団体の活動紹介と活動体験として「ペパ鉛筆（リサイクル鉛筆）づくり」と「平和の折り鶴づくり」を行いました。



この図の「社会的居場所」に『岐阜ダルク』がはいっています。

H24年4月22日

チャリティーコンサート

岐阜カトリック教会様のご協力を得て会場をお借りし、チャリティーコンサートを開催しました。ダルクを支援してくださる演奏者と声楽者の方々が無償で出演してくださいました。当日は雨となってしまいましたが、雨の静けさの中に美しく、優しい調べが聖堂にこだましました。「アヴェマリア」「ハナミズキ」などの楽曲を演奏してくだり、心に響く音色に、中には目に涙を浮かべながら聞いている方もいらっしゃいました。たくさんの皆様にご協力いただき、このようなコンサートが開催出来ました事に感謝いたします。

チャリティーコンサートの皆様からの協力金は、215,556円でした。ご協力ありがとうございました。

羽田人権文化基金贈呈

羽田人権文化基金とは、私財を投じて人権啓発活動に情熱を注いだ故羽田辰夫弁護士が2010年4月設立した団体です。

人権擁護活動の支援を目的に助成金交付事業を行っている羽田文化基金団体様より、助成金三十万円をいただきました。この助成金は十月八日に行われる岐阜ダルク八周年フォーラムに使わせていただきます。会合では百二十人が出席し「岐阜で高い志を持って人権活動に励んでいる人を応援していきたい」と代表の森川理事様のあいさつに始まり、人権大賞者一名と岐阜ダルクと他一団体に助成金が交付されました。心よりお礼申し上げます。

岐阜ソロプチミスト様より

平成24年度ソロプチミスト日本財団活動資金援助の応募申請があり、岐阜ソロプチミスト様に推薦していただき大変お世話になりました。選考結果は9月発表です。（ドキドキ・・）また、受刊者に送るダルクの本を購入していただきました。ありがとうございました。

活動報告

4月

1日	山梨ダルク
5日	ダルク後援会議
	ニューズレター発送作業
13日	中津川更生保護女性会講演
14日	薬物電話相談日
15日	岡崎自啓会講話
16日	毎日新聞取材
20日	更正保護施設「光風荘」面接
21日	アディクションセミナー
	羽田基金セレモニー
22日	チャリティーコンサート
25日	社会的居場所運営会議
27日	笠松刑務所薬物離脱指導
28日	薬物電話相談日

5月

2日	岐阜市協働センター総会
9日	笠松刑務所薬物離脱指導
12日	薬物電話相談日
13日	一宮聖光教会募金活動
	布池カトリック教会募金活動
17日	ダルク後援会議
19日	NA山梨バーベキュー
20日	清流マラソンボランティア
22日	保護観察所家族会講話
26日	NAオープンスピーカー
	薬物電話相談日
27日	若者支援ネットワーク例会
	社会的居場所運営会議
29日	DVD制作慰労会
30日	笠松刑務所薬物離脱指導

6月

1日	韓国ダルク開設フォーラム
2日	NA北九州ステップセミナー
4日	理事会
6日	社会的居場所事業運営会議
7日	ダルク後援会義
8日	ボランティア
9日	薬物電話相談日
	依存症を学ぶ集い
10日	大垣ルーテル教会募金活動
12日	岐阜県立八百津高等学校講演
17日	各務原カトリック教会募金活動
18日	岐阜市立岐阜西中学校講演
20日	笠松刑務所薬物離脱指導
21日	更正保護施設「光風荘」講話
23日	電話相談日
24日	子供若者ネットワーク定例会
25日	理事会　総会
26日	居場所事業・リーフレット配布
27日	笠松刑務所薬物離脱指導
28日	岐阜県立本巣松陽高等学校講演

NPO活動PRパネル作成

NPOの活動を紹介するパネルを考えて、作りました。初めての共同作業！！

H24年6月18日～6月29日まで岐阜市役所1階ロビー、7月2日～6日じゅうろく徹明ギャラリーにて展示されました。

5月19日

NA山梨BBQに参加

山梨のBBQのフェローシップに参加。魚釣りもしました。たくさんの仲間と会えました。

魚捕ったどぉー！

岡崎に花見に行きました

花よりだんご

6/8　野宿生活者支援ボランティア

地域で活動している衣類整理のボランティア活動を行いました。

6/2 韓国ダルク開設フォーラム

韓国に新しくダルクが出来ました。開設記念フォーラムに参加してきました。
届け！希望のメッセージ！！

体を鍛えるぞ～

6/19　岐阜西中学校講演

今日一日を精一杯生きる。やりたいことがあればあきらめないでことが大切！！

今後の活動予定

7月

1日	友愛キリスト教会募金活動
3日	笠松刑務所薬物離脱指導
6日~8日	NAリージョナルコンベンション
9日	社会的居場所運営会議
10日	日本福祉大学講演
13日	ダルク後援会誼
	ニューズレター発送作業
	野宿生活者支援ボランティア
14日	薬物電話相談日
15日	岐阜ルーテル教会
17日	更正保護施設「洗心の家」講話
22日	大垣キリスト教会募金活動
24日	笠松刑務所薬物離脱指導
28日	薬物電話相談日
29日	美濃加茂カトリック教会募金活動
	越前地区更正保護のつどい講演

8月

5日	緑キリスト教会ＰＲ活動
3日	パネルディスカッション会議
11日	薬物電話相談日
19日	木曽川キリスト教会
21日	保護観察所家族会
25日	薬物電話相談日

9月

3日	東三河家族会講話
8日	薬物電話相談日
22日	薬物電話相談日

女性薬物依存症者リハビリテーションセンター
岐阜女性ハウス（仮称）設立に向けての
お願い

ＮＰＯ法人　岐阜ダルク
理事長　由井滋
施設長　遠山香

・女性薬物依存症者がいきいきと暮らすことができる場所を設立したいと計画しています。

薬物依存症者が精神病院あるいは刑務所から社会生活に戻った場合、薬物を再使用する割合が高く、また例え再使用しなくても、社会復帰をするにはかなりの困難が伴います。
その困難を乗り越えるためには、同じ病気を抱えた仲間との共同生活をすることで、仲間同士が互いを鏡とし、共感と思いやりを感じながら、孤独に陥らない環境を保つ必要があります。

・なぜ女性薬物依存症者社会復帰施設が必要なのでしょうか

全国に刑務所は６２ヶ所ありますが、**女子刑務所は７ヶ所しかありません（2010年４月現在）。**
女性が薬物依存になるのは男性から薬物を勧められることがきっかけとなるケースが多い。全国各地にダルクは６７箇所あり、男性の薬物依存者７００名がリハビリを受けています。ところが女性の入寮施設は、栃木・東京・大阪・高知・宮崎の**わずか５ヶ所・６０名程の女性しか回復支援を受けられていません。**施設の絶対数が不足しているのが現状です。

・なぜ岐阜ダルクなのでしょうか

笠松刑務所の受刑者６３５名中、**薬物離脱指導対象者は２８４名（４４．７%）**に上ります。
笠松刑務所への薬物離脱指導を岐阜ダルクが平成１７年３月から行っています。また、**岐阜ダルクの施設長遠山香は女性の回復者**でもあり、女性薬物依存者の受け皿としての要望も強くあります。

・設立までにいくら必要なのでしょうか

女性ハウス設立準備に必要な金額を試算いたしました。

設立準備基金試算総額３５０万

女性ハウス設立時	当面１年間の運営に必要な経費
● 施設礼金・敷金 300,000円	● 施設の家賃　840,000円（年間）
● 備品（電化製品・中古品家具・寝具等）800,000円	● 水道・光熱費等 360,000円（年間）
	● 人件費　1,200,000円（年間）

＊ 入寮者受け入れ人数６名、専従スタッフ１名とボランティアスタッフで運営の予定で試算しました。

・設立準備基金の口座を開設いたしました

岐阜ダルクは平素より、その運営費のほとんどを皆様からのご寄付によって運営して参りました。
通常の運営資金とは別に準備基金専門の口座を開設いたしました。

※ 女性ハウス設立準備基金　郵便振替口座番号　００８２０－３－２０７２３０
加入者名　岐阜ダルク女性ハウス設立準備委員会

どうか、ご理解とご協力をよろしくお願いもうしあげます。

「ダルク女性ハウスの必要性について」

各務原病院　ＰＳＷ 澤木幾佐

当院から中間施設への入所者は、昨年度でようやく２０名を超えました。そのうち半分以上の人々が、今も全国各地のダルクで回復の螺旋階段を上り続けています。回復するか否か…それは、様々な条件を要しますが、ピア（同じ）という要素が極めて重大な鍵を握っていることは言うまでもありません。ひとは持っていないものは手渡せない。依存症の回復のプロセスやノウハウ等については、当事者だけが触れることのできる領域がかなりの割合を占めると、私自身は考えています。

「女性ハウスの立ち上げを考えている」そう遠山さんから聞いたのは、今から２年程前でした。岐阜ダルクには尊い女性の回復者が何人かいて、このままの状態では大変勿体ないと、私は日頃からハンチを噛むような思いでした。依存症治療において、性という垣根のない回復者モデルは、ピア的な要素を否が応でも強めることになります。加えて、回復は模倣から始まる一面を持っています。今もまだクスリやアルコールを使っている人々にとって、同性の回復者の生き生きとした姿を目にすることは、「あのひとみたいになりたい」「薬をやめたい」など、前向きな気持ちをより一層惹起しやすいとされています。「回復は内面から始まる」ということばがありますが、それは、仲間との出会いから始まると言っても過言ではありません。回復の旅にはガイドや仲間が必要です。ジャングルをガイドなしに歩くことは無謀でもあるように、回復にもガイドとなる先行く仲間や、一緒に荷物を持ってともに歩く仲間、振り返って思いやる仲間が必要だと私は考えます。

かの有名な自助グループが出来た１９３５年当初から現在に至るまで、否。もっと古い時代から、依存症の治療は男性と比較し、女性の回復は極めて困難な状況にあるとされてきました。現在に至って、大多数の男性依存症者と対比し、女性は５分の１とも６分の１とも言われる程少数であり、回復過程においても性差を考慮した支援が必要であると考えられてきました。しかし、マイノリティ中のマイノリティにも関わらず、女性専用のハーフウェイハウスに入所できる人員は１００人にも満たない程だと言われています。（現実には何万人もの女性の依存症者がいるのに！）今回、岐阜ダルクが女性ハウスを設立することは、この地域における依存症治療の大きな一歩となることは間違いありません。ダルク女性ハウスは、これまでの実践哲学を基に、より個別性に応じた、かつ集合的で包括的な回復過程を成し得るだろうと考えられます。今後、ハウスでは女性だけのクローズドミーティング（女クロ）を始め、女性に特化したプログラムが充実していくことでしょう。加えて、回復が非常に難しいとされるなか、岐阜という地域に女性の回復者が既に何名もいることは、周囲の深い理解や温かな受容、配慮ある助勢のたまものであるとも考えられます。この素晴らしい回復の連鎖反応が続くようにと、祈りにも似た気持ちで、これからも、この岐阜という美しい地で、共にソーシャルワークの輪を築いていけたらと願っています。

施設長だより

施設長　遠山香

大型二輪の免許を取得した。

20才の頃、子供が生まれたことであきらめたが、27年の歳月を経てチャレンジ。

運動神経には自信があったがそんなものはどこへやら・・・

教習中は転びまくり、先生には「おいおいバイク壊すなよ」と言われ、検定試験4度目の失敗で、わんわん泣いて「先生の教え方が下手だからだ～」と八つ当たりする始末。

（恥かしすぎる・・・）

もう受かるわけがないとマイナス思考にはまり込み、逃げ出したくなり、とうとう薬の欲求までは入る始末。

バイクの試験の事を考えると、吐き気までするようになり、夫にもずいぶん心配をかけた。

「そんなに苦しいならやめればいい」と言ってくれるなぐさめの言葉。思いやりの言葉だとわかっちゃいるけど腹が立つ・・・

5度目の検定試験の前日、「バイクの試験がなかなか受からなくてさあ。」と泣き言を父親に言うと、「そんな危ないことはやらない方がいい」とダメ出しされてプチぎれ。でも父の一言に「絶対受かってやる！！」とやる気が出た。

検定当日、夫が祈ってくれる言葉に耳を傾け、自分でも、マイナス思考に陥る気持ちを取り除いてくれるよう神様にお祈りし続け、検定試験に臨んだ。合格って言われたときの喜びといったら・・涙・涙でした。

父に「昨日はごめんね。免許とれたよ」と電話すると「おめでとうとは言いたくないけどなあ」と笑いながら父が言った。「安全運転で気をつけて乗るからさあ」と私。

今回のチャレンジで、性格上の欠点にたくさん直面。もっと成長したいな～と思う。

夫とツーリングもいいけど、女性のツーリングチームを作って走るなんてのもいいかもとユメ見るこの頃。

平成23年度　特定非営利活動に係る事業会計収支計算書

平成23年4月1日から平成24年3月31日まで

特定非営利活動法人　岐阜ダルク

科目	金額		
（資金収支の部）			
Ⅰ 経常収入の部			
1 会費・入会金収入			
普通会費	27,000	27,000	
2 事業収入			
講演料	264,798		
薬物離脱指導料	500,000		
バザー・フリーマーケット	76,160		
利用者入寮費	910,637		
その他	31,350	1,782,945	
3 助成金			
地方公共団体	1,580,000		
民間	165,000	1,745,000	
4 寄付金			
後援会寄付金	3,200,000		
一般寄付金	1,105,425		
募金	347,060	4,652,485	
5 雑収入			
受取利息	90	90	
経常収入合計			8,207,520
経常支出の部			
1 事業費			
薬物依存症者のリハビリテーション施設の設置運営	4,976,360		
薬物依存症者等の相談及び生活支援事業	674,387		
薬物依存に関する教育、講演会、研修会、セミナー、イベント等の薬物依存症者の福祉に資する広報事業	823,196		
薬物依存症者の福祉に資する広報事業	360,490	6,834,433	
2 管理費			
法定福利費	384,868		
委託料	150,000		
通信費	50,245		
消耗品費	26,926		
修繕費	13,000		
水道光熱費	70,070		
賃借料	300,000		
租税公課	200		
諸会費	24,000		
雑費	4,095	1,023,404	
経常支出合計			7,857,837
当期収支差額			349,683
前期繰越収支差額			252,374
次期繰越収支差額			602,057
（正味財産増減の部）			
Ⅲ 正味財産増加の部			
1 資産増加額			
当期収支差額		349,683	
増加額合計			349,683
Ⅳ 正味財産減少の部			
1 資産減少額			
建物付属設備減価償却額		117,705	
車輌運搬具減価償却額		589,833	
什器備品減価償却額		331,879	
減少額合計			1,039,417
当期正味財産減少額			689,734
前期繰越正味財産額			2,083,974
当期正味財産合計			1,394,240

女性ハウス（仮称）物件情報のお願い

女性薬物依存症の仲間が入寮できる施設の設立を考えています。

そのため岐阜市内で空き家を探しています。

よい情報をぜひ岐阜ダルクまでお知らせください

連絡先　岐阜ダルク　施設長　遠山　TEL 058-251-6922

ご協力ありがとうございます

献金者名（3月15日～6月17日まで到着分）順不同

棚橋和隆・幸子 山本弘子 五十川のぞみ 山田慶子 同盟福音基督教会・岐阜キリスト教会 青井初恵 水野由美 三嶋須磨子 野々垣多美子 岡田千歳 田口大輔 吉田春江 カトリック名古屋教区社会福祉委員会・ 那加教会 永島恵美 桜井康子 藤江功 吉田和郎 小比賀幸子 伊佐地金嗣 可児福音教会 岡江喜美江 久松定昭 林宣 岡崎修道院 渡辺真帆 弁護士・伊藤千恵子 須田裕 北谷雅春 弁護士・長澤清 野村淳 弁護士・神谷慎一 山田直 池田ひろみ 中尾年春 カトリック大垣教会 脇田登美枝 伊藤幸雄 木曽由美子 幼き聖マリア修道会 脇若保雄 柴田るみ子 弁護士・朝守令彦 池谷佳代子 須田敦子 今川キメ子 臨済宗正願寺・小島良徹 岐阜純福音教会の皆様 布池カトリック教会の皆様 一宮聖光教会の皆様 大垣ルーテル教会の皆様 各務原カトリック教会の皆様 カトリック岐阜教会の皆様 匿名者多数

女性ハウス設立準備基金寄付金

ぜんしん保育園 伊藤久代 柳原清盛 伊藤和子 斎藤栄治 古澤康

献品者名

小西和子

※ 発送作業簡略化のため皆様全員に振込用紙を同封させていただいておりますことをご了承下さい。また匿名希望の方は、恐れいりますが、その旨を振り込み用紙通信欄にその都度ご記入下さいますようお願い致します。

※岐阜ダルク　郵便振替口座　00840-5-167752　岐阜ダルク後援会
※女性ハウス設立準備基金　郵便振替口座　00820-3-207230　女性ハウス設立準備委員会

編集後記

△かねてより懸案の女性ハウス設立準備がはじまりました。よろしくお願いします。（鈴木）
△今回はそんなわけで12ページの増刊号です。（鈴木）

編集　特定非営利活動法人　岐阜ダルク
編集担当　岐阜ダルク後援会　齋藤幸二　鈴木輝一郎
〒500-8175 岐阜市長住町7-3　TEL/FAX：058-251-6922
Email：gifudarc2004@yahoo. co. jp　ホームページ：http:// www. gifu－darc. org/
2012年　岐阜ダルクニュースレター（No.36）
定価　1部　200円
編集責任者　遠山　香
発行所　東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸の内3-6-43　みこころセンター